

PPN9 と最先端の西アジア新石器時代研究

—第9回近東先土器新石器時代石器研究国際会議・東京大会への参加記—

下釜 和也*

The 9th International Conference on the Pre-Pottery Neolithic Chipped and Ground Stone Industries of the Neolithic Near East and Current Diversifying Studies

Kazuza SHIMOGAMA

キーワード：国際会議、先土器新石器時代、石器研究

Key-words: international conference, Pre-Pottery Neolithic, lithic studies

第9回近東先土器新石器時代石器研究に関する国際研究会（The 9th International Conference of the Pre-Pottery Neolithic Chipped and Ground Stone Industries of the Near East。以下、PPN9 と略）が、2019年11月12日から16日まで5日間、東京大学小柴ホールを主会場として開催された（図1）。この研究会は、打製石器と磨製石器をはじめ西アジア先土器新石器時代の石器研究に特化した研究会議として知られる。1993年の第1回ベルリン大会以後（西秋1993）、数年おきに開催されており、過去大会の様子については当学会会員の動向報告にもすでにある（前田2003；長屋2017）。西秋氏や前田氏がそれぞれの参加録で「比較的小さく身内の集まりのような集会」

「研究者連絡会」というように、もとは小規模なワークショップ形式であって、西アジア地域をフィールドとする研究者同士の情報交換と交流促進が目的の一つであった。それにも関わらず、各大会後には大部の研究論集を逐次刊行し、本研究会の成果は西アジア先土器新石器時代の理解に大きく裨益してきた。また大会を重ねるにつれ、打製石器のみならず磨製石器や石製ビーズ・容器などに関する研究発表も加わり、全般的な「石器」研究を目指して裾野を広げてきた。

今回の第9回東京大会は、東京大学総合研究博物館の西秋良宏教授（当会会長）を実行委員長として、実行委員には先史時代研究を専門とする当学会会員で、過去大会への参加経験者が名を連ね、本大会の運営に



図1 PPN9 会場の様子（安倍雅史氏提供）

*古代オリエント博物館 The Ancient Orient Museum

尽力した（安倍雅史、赤司千恵、有村誠、藤井純夫、門脇誠二、前田修、小高敬寛の諸会員〔敬称略〕）。とりわけ本大会の趣意は、主催側の関心に沿って、近東新石器時代の発展を地域的な展望で、特に東方からの視点を重視して考えることにあると主催者はうたう（PPN9-Tokyo Organizing Committee ed. 2019: 3）¹⁾。

本大会にとって、またその他の西アジア考古学関連研究会議にとっても、17もの国々から実に100名近いほどの考古学研究者がフィールドから遠く離れた日本に集結するのは初めての試みであったのではなかろうか。欧米から空路10時間以上かかって研究会に参加するのも海外の研究者にとっては初体験の方が多く、交通経費など経済的な負担の面で若手研究者への支援を格別に配慮したとも主催者から仄聞した。

本動向報告では、大会のすべての口頭発表およびセッションに参加した筆者が感じた点をかいつまんで報告する。筆者はふだん土器を主に研究する身であるため、本大会で報告があった最先端の石器研究について正しく評価できていないとの誹りは免れないが、その点をご寛恕いただきたい。

PPN9 東京大会の概要

西アジア先土器新石器時代の意義は多様にある。打製石器や磨製石器の型式・技術的研究を通じた考古学的編年の精緻化や当時の人々の行動復元にかかわる研究はいうまでもないが、狩猟採集から農耕牧畜という生産経済への変化と石器の形態や変化がどのように結びついてきたかは主要な研究テーマの一つである。さらに、ギョベクリ・テペ（Göbekli Tepe）に代表される大規模な公共建築遺構群、特異な象徴遺物、宗教儀礼と共同体、黒曜石の獲得と流通の問題、定住集落の成立と発達など、西アジア、ひいては世界の先史人類が大きく転換を遂げたフロンティアの一つとして、先土器新石器時代という時代は非常に重要である（Cauvin 1994; Verhoeven 2002; Simmons 2007; Hodder ed. 2010; Rosenberg and Rocek 2019 など）。

本PPN9大会でもこうした研究課題に迫るべく様々な研究発表があった。それら多岐にわたる発表のすべてを、この短文で批評しつつすることはできないが、いくつかのテーマや論点を取り上げながら紹介してみたい。PPN9では各日程で12本から17本、総計62本の口頭研究発表、そして計16本のポスター発表が行われた。口頭発表はそれぞれテーマ別に分類され、以下のような12のセッションに分かれていた（プログラム順、括弧番号は便宜上著者がつけたもの）。やや煩雑になるが、本大会の概要と特徴を明瞭

に示しているのでここに採録する。

- (1) 「道具の製作と使用（Production and Use of Tools）」
- (2) 「先土器新石器時代の先駆、ナトゥーフ・ホライゾン（Natufian Horizon: A PPN Predecessors）」
- (3) 「乾燥地帯における新発見（New Discoveries in the Arid Areas）」
- (4) 「西からの視角：レヴァント地方の石器伝統（Outlook from the West: Levantine Lithic Traditions）」
- (5) 「石器を超えて先土器新石器社会を論じる（PPN Societies Beyond Lithics）」
- (6) 「石器からみたエジプトとの関係（Egyptian Connection in Lithics）」
- (7) 「東からの視角を広げる：コーカサス地方からザグロス地方にかけての石器群（Extended View from the East: Lithics from the Caucasus to Zagros）」
- (8) 「南東アナトリアにおける石器伝統（Lithic Tradition in Southeast Anatolia）」
- (9) 「磨製石器・石製品・非加工石の利用（Use of Ground, Polished and Unworked Stones）」
- (10) 「キプロス島における打製石器と磨製石器（Chipped and Ground Stones in Cyprus）」
- (11) 「黒曜石の獲得と利用（Procurement and Use of Obsidian）」
- (12) 「カッパドキア地方における新展望（New Perspective from Cappadocia）」

東方や北方からの新たな研究視角

これらのセッションの中でも特に注目されるのは、コーカサス地方やイラン高原、中央アジアを取り上げた(7)「東からの視角を広げる」である。前回のPPN8ニコシア大会ではコーカサス・イラク・イラン高原について4件の発表のみであったのに対し（長屋2017: 142 および図2）、今回はそれを大幅に上回る17件（イラク、イラン、南コーカサス、中央アジアの合計）を数えた（図2）。口頭発表としては他のセッション項目を凌駕する12件が含まれ、何より今回のPPN9の真骨頂として印象深いものとなった。これには、後述するように、当学会会員の調査を含むコーカサス地方の出土資料の増加や、ガンジ・ダレ（Ganj Dareh）をはじめとしてイラン人研究者らによる新石器時代遺跡の再発掘や資料の再評価、新資料

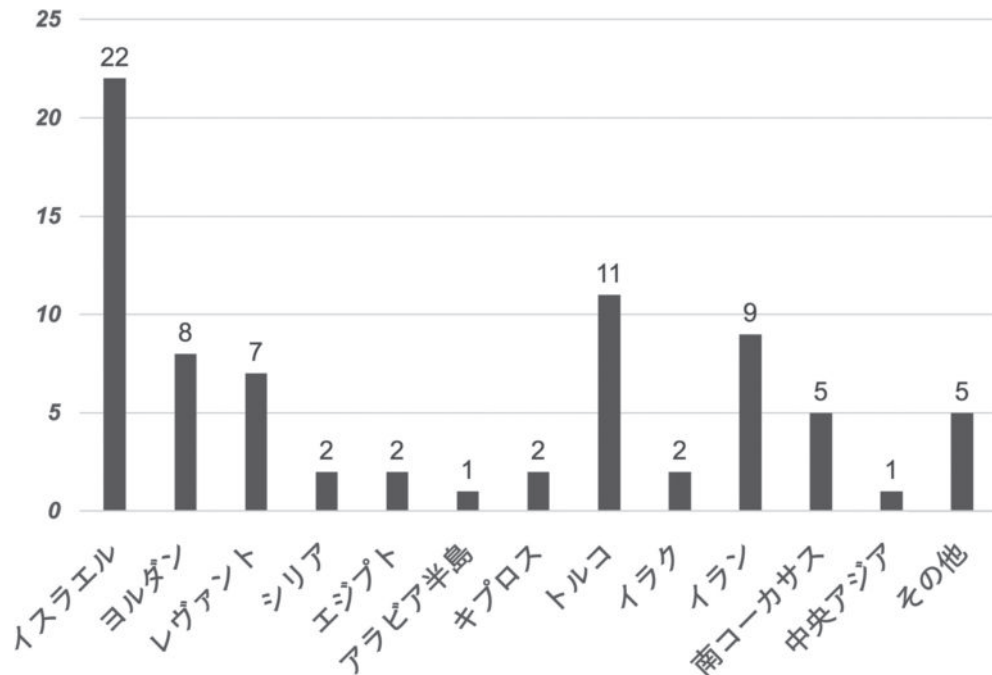


図2 対象地域別の発表件数

の研究が基礎となっており、西アジア新石器時代における石器伝統の展開について東西のバランスのとれた解釈を試みる上で有意義であったといえる。

南コーカサス地域に関して、アルメニアにおける中石器時代と新石器時代の石器群の異同を石材獲得、石刃の型式技術論の点から論じた有村誠氏ら、そしてアゼルバイジャンのメンテシュ・テペ (Menteş Tepe) の新石器時代打製石器群を検討した L. アストリュック氏 (Astruc) らはいずれも、新石器時代石器の原石材である黒曜石産地が多様であったことを指摘した。また、ダムジリ洞窟 (Damjili Cave) の中石器・新石器時代石器群の比較を行った西秋良宏氏らは、両者の石器群の移行が極めて急速な過程を示すとして、在地集団と外来集団の間に複雑な相互交流があったことを発表した。同じくアゼルバイジャンのギョイテペ (Göytepe) 出土黒曜石製石器を検証した池山史華氏のポスター発表では、押圧剥離による大型石刃製作技術に地域差があるとした。南コーカサスにおける新石器化をめぐる、石器の原石材獲得、技術的特徴などに多様性がみられるとすれば、それはすなわち新石器化を担った在地集団の本来の多様性によるのか、それとも農耕牧畜という新たな生業体系の受容によって集団間に差異が生じたのか。当時の集団交流の推定に寄与する点で今後の研究進展が望まれる。また、門脇誠二氏の研究は、新石器時代最初期にあたるハッジ・エラムハンル・テペ (Hacı Elamxanlı Tepe) の打製・磨製石器両方に関して緻密な空間分析を施し、石器の廃棄行動と空間利用の観点から検討

した。初期農耕村落における石器利用行動の復元に重要な示唆を与えるものであり、同地域における石器研究が他地域に劣らず良質なデータを提供していることを証する。

イラン高原における新石器化研究も俄然盛んになってきた。キャマルバンド (Kamarband) やホトゥ (Hotu) などの洞窟遺跡で知られるカスピ海南岸域では、近年集中的な調査が再開されてデータが増えている。H. ファゼリ＝ナシュリ氏 (Fazeli Nashli) と M. W. グレグ氏 (Gregg) はコミシャーニ・タッペ (Komishani Tappeh) の調査成果に基づいて、野生のヒツジ・ヤギ、野生オートムギやオオムギなどの広範囲生業が前 10 千年紀末期に発達し、その後の家畜化・栽培化へと漸移的に変化したと結論付ける。同じ地域のコミシャーニ洞窟 (Komishan Cave) の石器標本を分析した M. ジャーイエズ氏 (Javez) と H. ヴァフダティ＝ナサブ氏 (Vahdati Nasab) は、湧別・幌加技法とも比較しうるような両面調整石核による細石刃生産が中石器時代以降になって開始されると発表した。先のファゼリ＝ナシュリ氏らも前 9 千年紀半頃以降、押圧剥離技法による細石刃石核が出現したとするが、それらの石器群の位置付けに関してはメソポタミアの細石刃技術と比較しつつ、慎重に評価する必要があるだろう。押圧剥離の細石刃技法の拡散については、西アジアからエーゲ海まで広範な地理領域を対象にした遺跡データベースを作成し、コンピュータモデリング解析を試みた B. ミリッチ (Milić) 氏らの研究発表もあった。彼らによると、同技法の拡散は

エーゲ海一帯では原石材の流通と新石器化過程とも相関がみられるという。そうした拡散メカニズムの予測はイラン高原やメソポタミアでも当てはまるのだろうか、気になるところである。

このことに関して、D. ベアード氏 (Baird) は北イラク・クルディスタンでカリム・シャヒル遺跡 (Karim Shahir) ほかを再発掘し、細石刃と押圧技法による石刃生産の良好な標本を得たという紹介があった。その後のイラン高原の新石器時代は、レヴァント地域のナヴィフォーム系石刃石器群とは異質な押圧技法による細石刃石器群が卓越するが、J. トマルスキイ氏 (Thomalsky) によれば、それらは地域性を孕みながら次第に大型化する一般傾向がみられるという。また、ナヒチェヴァンのキュルテペ1 (Kultepe 1) 遺跡で前7千年紀末の居住層に達し、イラン領東アゼルバイジャン州では未知の黒曜石産地が発見されるなど新発見が相次いでいるとの報告があった。にもかかわらず、北メソポタミアと南コーカサスの様相とを繋ぐ地域にあたる北西イランのデータ群が不足しているという彼女の指摘は正鵠を射ていよう。

かつて R. J. ブレイドウッド氏 (Braidwood) らが先駆的調査を行ったザグロス地域においても、最近新しい展開がみられる。H. ダラビー氏 (Darabi) と T. リヒター氏 (Richter) はギャンジ・ダレとアシアーブ (Asiab) の再発掘を通じて、層序の確認を行うとともに生業戦略や居住形態を考察し、ザグロス地域における新石器化を再検討している。特にアシアーブ遺跡では大型の公共建築遺構とイノシシ頭骨の集積を発掘し、ここが前10千年紀末頃の祭祀センターであった可能性を提起した。

イラン高原における後期新石器文化の地域的な多様性という点では、前7千年紀末のムシュキ期石器群を検討した安倍雅史氏らの発表も注目された。この時期に野生獣の狩猟が再活性化、石器群がふたたび細石器化するという現象が、8.2 ka の気候変動に連動したものと推定した。イラン高原の他の地域ではどうだったのか、比較検証が待たれる興味深い研課題である。

北イラクを含むメソポタミア地域やイラン高原では、政情不安に伴い集中的な調査が途絶えていたこともあって、依然として未解明の地域がミッシング・リンクとして残されている。ミリッチ氏らによるイラム地方での分布調査の成果や、小高敬寛氏らの調査によって独特の石刃石器が発見されたという報告をはじめ、今後ますます新展開が予想されよう。

南コーカサス、イラン高原、イラク北部における石器データの蓄積と研究の進展は、新石器時代における石器研究の「コア」地域であり続けたレヴァント地域の相対化、西アジア全域の石器伝統の理解と広域での石器変化を捉える上でも非常に重要な成果といえる。

レヴァント地域の先土器新石器時代で論じられるような高精度の編年構築や集落構造や宗教儀礼といった諸問題を同じ水準で比較するにはまだ至らないが、基礎的なデータは着実に増えてきたという実感を本大会で得ることができた。

レヴァント地域における先土器新石器研究の展開と充実

上述の肥沃な三日月地帯以北・以東の諸地域に対して、イスラエルやヨルダンを中心としたレヴァント地域を対象とする研究発表数は本大会でも圧倒的に多く、同地域における発掘調査の進展や新出資料紹介の点でその確固たる存在感を示した。このことは過去の大会と変わらない。前述のセッションでいえば (2) ~ (4)、そして何より同地域の新石器時代研究の蓄積を物語るようなセッション (5) がそれにあたり、理論的試論も含めて全体で6割近くを占める (図2のイスラエル、ヨルダン、レヴァント項目)。このPPN9大会に関して、いち早く *Neo-Lithics* 誌に批評を掲載した H. G. K. ゲーベル氏 (Gebel) は、「全発表の25%ほどが石器以外に関わる研究発表」、つまり最新の遺跡調査概報を含む、純粋な石器研究ではないものだったと述べる (Gebel 2019: A7)。氏も指摘するように、石器の型式技術論的・編年・分布論的な研究の他にも、石器製作技術がより大きな社会経済的、心理的背景と密接に結びついていたこと、石器群をそうした脈絡の中で解釈する必要があることは考慮されるべきである。その意味において、今回の研究発表にも多くあった新発掘の遺跡概報の類も研究会の本旨に多分に貢献するものであろう。何もレヴァント地域に限った話ではないが、そうした最新情報の提供と新しい石器群の紹介が多く印象的であった。その分、この地域の最新情報に疎い著者には最良の勉強にもなった。

例えば、30~40 ha もの規模を有するPPNB期の巨大集落モツァ (Motza) については、三次元計測データを活用して石鏃 (尖頭器) の形態分析を推し進めた H. ハライリー氏 (Khalaily) ら、フリント石器の熱処理を検討した D. イェゴロフ氏 (Yegorov) ら、遺構の構造と配置や墓葬を報告した J. ヴァルディ氏 (Vardi) ら、製作から廃棄まで動作連鎖に着目して出土石環を分析した I. ミレフスキ氏 (Milevski) らが注目される。

また、PPNB~PN期のナハル・ヤルムート38号遺跡 (Nahal Yarmuth 38) からは、A. エイリク＝ローズ氏 (Eirikh-Rose) らの遺跡紹介を筆頭に、石灰漆喰の床面を取り上げてエンタングルメントやアクター・ネットワーク論に拠って解釈を試みた D. アッカーフェルト氏 (Ackerfeld) らなど、ある特定の遺

跡に限って複数の発表をまたいで集中的に扱う例も見受けられた。

なかでも著者が特に興味を抱いたのは、PPNB 期における尖頭器（石鏃）の増加とサイズの長大化が集団間の暴力と関連するとした O. バルジライ氏（Barzilai）と H. メイ氏（May）の発表である。それを裏付けるかのような、尖頭器が胸椎に突き刺さったミシュマル・ハ＝エメク（Mishmar Ha-Emeq）遺跡の受傷人骨の画像は、西アジアでの稀有な出土例として衝撃的であった。さらに、M. ビルケンフェルト氏（Birkenfeld）らが発表した PPNB 後期のナハル・ロデド 110 号（Naḥal Roded 110）遺跡の事例も面白い。ここでは出土動物骨の大半がタカ科猛禽類のヨーロッパハチクマで、岩山上の遺跡立地も考え合わせると、発表者らは季節的な渡りを行う猛禽の狩り場として使われ、関連儀礼も行われた特殊な遺跡であったと推測した。南レヴァント先土器新石器時代の場の利用が多彩であったことを如実に示す研究例である。

その他、南レヴァントにおけるナトゥーフ期の検討（A. ヤロシェヴィチ氏 [Yaroshevich] ら、L. グロスマン氏 [Grosman] と A. ベルファー＝コヘン氏 [Belfer-Cohen] ほか）、先土器新石器時代の儀礼と象徴性（先述のビルケンフェルト氏ら）、石器の技術形態分析と集落や遺構との関係（F. ボレル氏 [Borrell] ら、R. クラサル氏 [Crassard] ら、A. レヴィ氏 [Levy]、L. ブライロフスキ氏 [Brailovski] と D. シャレム氏 [Shalem]、C. プルシュヴィッツ氏 [Purschwitz] ほか）、建築遺構にみる規格性（G. ハクライ氏 [Haklay] と A. ゴファー氏 [Gopher]）、レヴァント周縁のアラビア半島における新石器化（藤井純夫氏）、新石器社会の工芸生産とジェンダーの推定（S. ジャンモ氏 [Jammo] と常木晃氏）など、多岐にわたるテーマの研究発表はなんとも壮観であった。こうした基礎データの蓄積の上になつて、ゴファー氏らの植物栽培化の解釈をめぐる議論や、A. ベルファー＝コヘン氏と N. ゴリング＝モリス氏（Goring-Morris）らの新石器時代の社会他者論に代表されるような理論的検討も含めると、やはりレヴァント地域の調査研究の質量が他の地域に比べて、一頭地を抜いていることが窺われた。

アナトリア高原と黒曜石研究

黒曜石産地が集中するアナトリア高原各地の新石器時代研究の盛況ぶりは、今大会で 11 件のエントリーがあったことによっても肯ける。ギョベックリ・テペで巨石建築の築造から廃絶まで検討し、建築群の重層構造を最新のデータから読み解いた M. キンツェル氏

（Kinzel）の発表が大変興味深かった。セッション（8）の石器研究では、Ç. アルトゥンビレク＝アルギュル氏（Altınbilek-Algöl）らのグシル・ホユック（Gusir Höyük）遺跡から、前田修氏のハサンケイフ・ホユック（Hasankeyf Höyük）遺跡、J. シュリントヴァイン氏（Schlindwein）によるギョベックリ・テペまで、南東アナトリアにおける PPNA 期から PPNB 期にかけての石器分析が発表された。これらは石器群の技術形態論的な分析のほかにも、フリントの熱加工処理、黒曜石の原産地推定など多角的な研究手法を用いる場合が多く、石器群の基本的な性格と時間的変化を把握しようとする研究であった。南東アナトリアの特異な先土器新石器時代石器群と文化がレヴァントや北メソポタミアのそれとどう関連していたのか、さらなる研究の展開が期待されよう。

セッション（11）「黒曜石の獲得と利用」では、4 本の研究発表が 1 本を除きアナトリア高原を対象とした。E. ヒーリー氏ら（Healey）の「ビッグ・データ」にみられるように、蛍光 X 線分析（XRF）などによる定量的データの整備が進み、PPNA 期から PN 期にかけての黒曜石産地と流通の通時的変動や地域的傾向がかなり明らかになってきた。さらに、産地組成分析と石器型式を組み合わせた詳細な研究も進んでいる（R. モアー氏 [Moir] ら、H. C. シェヒター氏 [Schechter]、D. ギルボー氏 [Guilbeau]）。押圧技法が現れる頃に黒曜石の産地がギョルル・ダーからネネジ・ダーに変化すると指摘したシェヒター氏によるチャタルホユック（Çatalhöyük）出土石器の研究、ギルボー氏が発表したテペジク＝チフトリク（Tepecik-Çiftlik）遺跡が黒曜石の採掘と流通の拠点であったことなど、精緻な分析によって原産地周辺の状況が次第に判明しつつある。

こうした黒曜石研究は、最後の（12）カッパドキア地方のセッションで紹介のあったバルックル（Balıklı）遺跡など新たな発掘調査（ゴリング＝モリス氏ら）が進展をみれば、チャタルホユックやアシュクル・ホユック（Aşıklı Höyük）に代表される中央アナトリア独特の新石器文化の展開について、さらなる知見が得られるはずである。

磨製石器、石製装身具の新研究

上掲のセッション（1）や（9）から窺われるように、打製石器以外の石器を対象とした発表も多くみられた。製粉のための磨製石器、ビーズや石環といった装身具類、建材として石材加工、さらには自然の奇形石まで幅広い。こうした石製遺物の研究は、技術的にみれば打製石器と基本的な製作技術を共有しているものも多く、また先土器新石器社会の復元という点では

非常に有効である。レヴァント地域における石製ビーズの製作技術を俯瞰し、装身具の専業生産を検討した H. アルアラシ氏 (Alarashi) の研究、新石器人によって遺跡に持ち込まれた自然の奇形石に象徴性を見出そうとした K. シムチャク氏 (Szymczak) の異色の研究、非実用品としての黒曜石利用を検討したヒーリー氏らなどといった、打製石器だけではない石器研究は、新石器時代における文化的行動や生産技術、生業戦略の問題を先鋭化するものであった。

また、打製・磨製を問わず、石器をターゲットにした使用痕分析は、目新しい分析手法ではなくとも、石器の機能と生業戦略との関係について新たな地平を切り開く可能性を秘めていると言えよう (M. ゼイディ氏 [Zeidi] ら、P. N. ペデルセン氏 [Pedersen]、A. マッカーシー氏 [McCarthy])。

充実の関連イベントと概評

国際研究会の通例として本大会でも会期中、研究発表の合間をぬって、いくつかの付帯イベントが催された。なかでも印象的だったのは、大会3日目の研究発表後に行われた石器製作実演と石器陳列会である (図3)。前者は、山形県埋蔵文化財センターの大場正善氏を招聘し、細石刃をはじめ日本列島の石器を製作実演していただいたものである。それと同時進行で、国士



図3 大会3日目の研究会後に企画された石器製作実演

館大学名誉教授の大沼克彦氏、東京大学の鈴木美保氏・池山史華氏はテコを用いた押圧剝離による石刃製作を実演し、いずれも参加者の好評を博した。参加者の数名もすぐに飛び入り参加し、フランス代表 F. アッベ氏 (Abbès) は直接打撃によるナヴィフォーム石刃技法を、米国の若手研究者 T. M. バークット氏 (Barket) は黒曜石のノジュールから大きな両面加工石器を作っていた。それぞれ真剣な面持ちで脇目も振らず石器づくりに励んでいた光景は忘れられない。

実演の傍らでは、日本の調査団が発掘した石器標本のハンズオン展示が行われた。東京大学が調査したマルヴ・ダシュト (Marv Dasht) 平原新石器遺跡、東京教育大学によるイランのタッペ・サンギ・チャハマック遺跡 (Tappeh Sang-e Chakhmaq) などの出土資料、東京大学や筑波大学によるシリア調査での出土石器標本群、東京大学のアゼルバイジャン黒曜石標本などで、なんとも贅沢な会であった。シムチャク氏が持参した中央アジア新石器時代のケルテミナル文化の石器標本にいたっては、国内で目にすることがない貴重なもので、少なくとも筆者には異彩を放っていた。

大会4日目、すべての研究発表が終了した後は、一同、東京駅隣の KITTE ビル内にある展示施設インターメディアテクに移動した。明治期の解剖学教室を移築した厳かな講演会場で、実行委員長の西秋良宏教授が「日本列島の縄文文化をレヴァントからみる」と題する本研究大会の掉尾を飾る講演をおこなった (図4)。

初日に本郷の居酒屋で開催された歓迎会では、多くの参加者が初めてみるような刺身や酒の肴が並び、和気藹々、昼間の議論の続きに白熱したり、それぞれの調査や研究についての意見が交わされていた。また、F. ホウル氏 (Hole) の米寿の誕生日に近いこともあって、米寿祝いの言葉を銘した枅が配られ、日本酒で祝杯を挙げるといったイベントもあった。4日目の夕方にあった送別会でもイタリア料理を肴にして活潑な意見交換がつづき、初対面ながら多くの石器研究者の訾訾に接することができた著者にとっても非常に有意義であった。

大会全体が終わってみて一つ遺憾に思ったのは、日本考古学研究者の一般参加がそれほど多くみられなかったことである。西アジア石器研究について最新の知見を得られるまたとない機縁にもかかわらず、日本列島の旧石器時代～弥生時代を専門とする研究者や学生の参加が大変少なかった点、そして彼我の研究を比較したような活潑な質疑や議論がなかったのは、日本での開催であったことに鑑みてもはなはだ残念であったと感じる。西アジア先土器新石器時代と同時代、完新世初頭から前半期にあたる縄文時代の狩猟採集漁撈民の石器技術との比較、黒曜石の石材獲得と流通のメ



図4 最終日にJPタワー学術文化総合ミュージアム・インターメディアテクで行われた講演後の集合写真（安倍雅史氏提供）



図5 大会後の研修遠足にて（安倍雅史氏提供）

カニズム、植物利用と磨製石器技術、農耕文化受容と石器群の変化など様々な論点で彼我の石器群を比較検討し、同じ俎上で議論できれば、双方にとって一種の異文化交流となり有意義であったかもしれないと夢想する（最終日の西秋氏による講演発表は、翌日の遠足

への前口上ともなって、これを補う形となったが）。著者は参加できなかったが、最終日の研修旅行では一部の参加者が富士山麓の山梨県立考古博物館を見学したそうである（図5）。西アジア石器研究者の眼に日本の先史時代がどう映ったのか、次の大会でぜひ伺っ

てみたいものである。

最後に、今回の PPN9 東京大会は、当学会および日本における西アジア考古学研究の成果を世界に発信する意味でも格好のイベントであった。近年、海外の研究者を招聘する小規模な国際ワークショップは頻繁に開催されているが、今後、本大会と同等の、あるいはもっと大規模な国際学会を日本に誘致することも期待されるし、そうなるべきであると著者は信じる。世界的にみて西アジア考古学は今なお欧米や中東諸国の研究者が多い現状のなかで、研究フィールドから遠く離れた日本での開催は参加者の渡航費など経費の面でも会場運営の面でも困難が伴うが、この点においても PPN9 東京大会はその先駆として重要な参照軸となるだろう。末筆ではあるが、本大会を滞りなく運営し大成功に導いた実行委員会の皆様に感謝を表する。

註

- 1) 本大会全体のプログラムと各発表の要旨（それぞれ pdf 形式）は、特設ウェブサイトで入手可能である（<http://nishiaki-labo.jp/english/index/PPN-9+Tokyo.html> : 2020 年 1 月 15 日アクセス）。

参考文献

- Cauvin, J. 1994 *Naissance des divinités, naissance de l'agriculture: la révolution des symboles au Néolithique*. Paris, Editions du Centre National de la Recherche Scientifique.
- Gebel, H. G. K. 2019 Conference Report: 9th International

Conference on the PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Near East (PPN9), University of Tokyo, 12th–16th of November, 2019. *Neo-Lithics* 19: A7–12.

Hodder, I. (ed.) 2010 *Religion in the Emergence of Civilization: Çatalhöyük as a Case Study*. Cambridge, Cambridge University Press.

PPN9-Tokyo Organizing Committee (ed.) 2019 *PPN-9 Tokyo, The 9th International Conference on the PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Near East: Programme and Abstracts*. Tokyo, The University Museum, the University of Tokyo.

Rosenberg, M. and T. R. Rocek 2019 Socio-political Organization in the Aceramic Neolithic of Southwestern Asia: The Complex Evolution of Socio-political Complexity. *Journal of Anthropological Archaeology* 54: 17–30.

Simmons, A. H. 2007 *The Neolithic Revolution in the Near East: Transforming the Human Landscape*. Tucson, The University of Arizona Press.

Verhoeven, M. 2002 Ritual and Ideology in the Pre-Pottery Neolithic B of the Levant and Southeast Anatolia. *Cambridge Archaeological Journal* 12/2: 233–258.

長屋憲慶 2017 「西アジア先土器新石器時代石器研究者国際会議」第8回ニコシア大会」『西アジア考古学』18号 141–145 頁。

西秋良宏 1993 「西アジア先土器新石器時代石器研究者連絡会」第1回ベルリン大会」『オリエント』36 巻1号 154–158 頁。

前田 修 2003 「西アジア先土器新石器時代石器研究者連絡会」第4回大会」『西アジア考古学』4号 125–126 頁。